

おかまの唄

小川未明

青空文庫

松林まつばやしで、聞きなれた鳥とりの声こえがしました。窓まどをあけると、や

まがらやしじゆうからが、枝えだから枝えだをつたつて鳴ないていました。

「僕ぼくのにがしたやまがらではないかな。」

少年しょうねんが、じつとその姿すがたを見みていました。遠とおい町まちで逃にがした

のが、どうして、ここまで飛とんでこられよう、と思おもいました。

戦争せんそうのさいちゆうで、もし家いえが焼やけたら、かごの中の鳥なかとりが

わいそうだといって、自分じぶんはかわいいやまがらを逃にがしたし、友とも

だちも、おなじ日ひに、べにすずめを逃にがしたのでした。

「君きみのべにすずめは、南みなみの国くにへ飛とんでいくし、僕ぼくのやまがらは、

北きたのふるさとへ帰かえるだろう。」

ふたり
二人はよろこんで、飛んでいった小鳥を見送ったのでした。

少年は、それからまもなく、お祖父さん、お祖母さんのす
んでいられる田舎へ、疎開しました。この古いお家で、お父さん
が子供のとき、本を読んだり、字を書いたりなさったのだらう。
またお祖父さんは、

「これから、いろいろの鳥が、裏の林へくる。雪が降ると、山
鳥もうさぎもくる。そうしたら、捕ってやるぞ。」といわれま
した。

青々とした木々の葉が、いつのまにか、みごとに赤く、黄色
くいろづきました。すこしはなれた畑には、かきの実がたくさん
なっていたし、あちらの垣根のすみには、山茶花が、しめった地

面めんの上うえに散ちつて、いちめん、貝かいがらをしいたようでした。

小鳥ことりたちがいなくなつたと思うと、さあつと、風かぜが林はやしをかける音おとがして、つづいて、パラパラと、なにかの木きの実みが落おちる小ちいさな音おとがしました。

「どんぐりかしらん？」

ひとりごとをいって、少しょう年ねんは頭あたまをかしげていました。田舎いなか

へきてから、友ともだちが少すくないのでさびしかった。そんなとき、東とへきてから、京きょうがこいしくなるのでした。けれど、いつもお祖父じいさんが、

「雪ゆきが降ふると、スキーはできるし、また、きじの子こやうさぎを打うつてやるから、来らい年ねんの春はるまで、こつちにいるがいい。」と、おつしやると、その気きになるのでした。お祖母ばあさんまで、

「お正月しょうがつがくれば、おまえのすきなおもちをついてやるし、甘酒あまざけもこしらえてやる。」と、おつしやるのでした。

なんで少年しょうねんは、うれしくないことがありましよう。そればかりではなく、せつかくしたしくなつた村むらの学校がっこうのお友ともたちとも、わかれなくなつたのです。それであるから、

「僕ぼく、すっかりなれてしまった。」と、元氣げんきよく答こたえるのでした。「ほんとうか。それなら、いつそこつちの子こになるか。」と、お祖父じいさんは、にこにこしながらいわれました。

「いいけど、さびしいんだもの。」

これは、いつわらぬ少年しょうねんの心こころのうちでありました。生まれ
たときから、明あかるい空そら、いつも花はなの咲さいている景色けしきしか知しらない

のが、まったく、ちがった自然しぜんに接せつしたからでした。

海うみを見れば、青あおぐろい色いろをして、波なみの底そこには、どんなものがすんでいるだろうかと思おもわれ、高たかい山やまを見れば、山やまの向むこうにも町まちがあつて、人ひとや馬うまが歩あるいているだろう、と考かんがえさせられるのでした。

急きゆうに、耳みみをすました少しょう年ねんは、

「いまじぶん、雷かみなりが……。」と、おどろきながら、二階かいへ上あがつて、空そらを見まわしました。

海うみの方ほうは、いつものように暗くらく、おどる波なみだけが白しろかつた。屋や根ねの上うえには、灰はい色いろ、きつね色いろ、だいたい色いろ、さまざまの雲くもが、かさなりあつていた。そのため、日ひはかげつていたけれど、雲くもの

切れめから深い穴をのぞくように、青い空が見えました。

「おじいさん、おそろしい絵を見るような景色ですね。」

少年は走りよつて、お祖父さんにたずねました。

「こちらは、これからいつもこんな空模様だ。」と、お祖父さんは、気になされませんでした。

あまり遠いので、そのうち、雷の音は下までとどかなかつたが、青白いいなびかりのひらめくたびに、雲の峰々を、浮きだすようにてらしました。

たまたま、金色の日の光が、もれてくることもありました。

それを見ると、天の上は、いつまでもかわらぬ、おだやかなところであるけれど、下は、雲がみだれて、戦争がつづけられてい

るような気がしました。

少年は、よくできた飛行機に乗って、雲の上へ飛んでいき

たくなりました。

夕飯のあとは、お祖父さん、お祖母さん、少年の三人が、いろいろのはたで枯れ枝や松葉をたき、毎晩のように楽しくお話をしました。

やがて少年は、床へはいつて、お父さんや、お母さんのことを思い出しながら、ねむってしまいました。

あくる朝、目をさますと、お祖母さんは、とつくに起きて、お勝手ではたらいでいられました。かまどに火がもえ、ぴかぴか光るおかまから、白い湯気が立ち上っていました。あとから、あと

から追いかけては消えてなくなる湯気を見ていると、そのうちに、
ぷつぷつと、勢いよく吹き出して、重いふたを動かしました。

「おばあさん、おかまがおこつて、小言をいつているのだね。」
と、少年は、床の中でいいました。

「よくたけたといつて、よろこんでいるのだよ。」と、お祖母さ
んは笑われました。

「おもしろいな。」

「おまえのお父さんも、小さいじぶん、よくそういつて、このお
かまの唄をお聞きなされたのをおぼえている。」と、お祖母さん
はいわれました。

少年が、昔からこのおうちでくりかえされるおかまの唄を、

とうとく^{おも}思^つて聞^ききました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

初出：「良い子の友」

1945（昭和20）年10月

※表題は底本では、「おかまの唄《うた》」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おかまの唄

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>